

虹

に

扇状地の歴史を継ぐ

209 元町職員の研究所長

稲穂の垂れる田園の間を縫うようにバスが進む。8月下旬に行われた日本大学地理学会のフィールドワーク。北陸新幹線の黒部宇奈月温泉駅を出発し、バスは黒部川の上流の方に向かった。

最初のポイントは愛本橋。地図を手にした教授や教員志望の学生ら24人が橋の上から平野部を見下ろす。左右に広がるのが黒部川扇状地で、この橋が扇の要の部分に当たった。

黒部川扇状地研究所の所長、鍋谷 良和さん(79)＝入善町＝が一行に解説する。「扇状地は砂利と砂ででき、痩せた土地でした。一方、水の浸透が非常に良く、地下水が大量に眠っています」。洪水の被害や土壌改良の歴史を、穏やかな口調で説明していく。

黒部川は3000級の連峰の間を流れる急流で、かつては洪水のたびに氾濫を繰り返した。川筋を幾度も変え、上流から運ばれた砂礫が数十万年かけて積み重なり、扇状地を形成していった。きれいな扇の形を描く地形は「典型的な扇状地」とされ、全国から地理学者がたびたび訪れる。

この地域の地理や歴史、動植物などを研究するのが、黒部川扇状地研究所。学者や住民らが会員となった民間の団体で、事務所は入善町にある。研究発表や小学生が扇状地を巡るイベントなどを行っている。会員数は120人。今年、50周年を迎える。

◇

1976年5月に発行された入善町の広報誌をめくると、研究所の設立が1ページを使って紹介されている。この記事を書いたのが、町役場で働いていた鍋谷さん。当時28歳。広報担当者となって初めて携わった号だった。当初から不思議な縁があった。

研究所の設立は、町のまちづくり指針「総合計画」が発端だった。町役場はコンサルタントに頼るのではなく、自分たちで作りしようと考え、地理などの専門家を委員に選んだ。総合計画ができた後も専門家との関係をつなごうと、高校教諭や町職員らが研究所を立ち上げた。鍋谷さんは、設立に深く関わっていた上司から誘われて会員になった。

鍋谷さんは団塊の世代で、役場に入ったのは高度経済成長期。後にバブル景気を迎え、自治体の業務が増えていった。コスモホールや総合体育館、海洋深層水の施設などの整備を担った。「歴代町長の最重要施

策を任されていたのが鍋谷さん」と話すのは、後輩の小森 裕さん(74)。「能力が高く、知識欲が旺盛。周りからは『任せたら大丈夫』という信頼があった」

鍋谷さんには「仕事はただ事務処理するのではなく、意味や中身をよく知り、工夫しなければならない」との考えがあった。仕事が好きというよりも、新たに担当した分野に自然と興味が湧いた。

遺跡の担当になれば自ら発掘に参加して論文を書き、「扇状地マラソン」の立ち上げに関わればマラソンも始めた。陶芸の施設の運営に携わると作陶に打ち込み、県内の美術展で入賞する腕前に。仕事から趣味の幅が広がっていったが、「一つのことには打ち込めてないってことですよ」と笑う。

◇

2007年、入善町出身で日本大教授の



水嶋 一雄さんが黒部川扇状地研究所の4代目所長に就いた。

鍋谷さんは、水嶋さんと魚津高校の同級生で、1年生の時は同じクラスだった。同じ列車で通学し、いつも一緒にしゃべっていたので、先輩から「どっちがどっちか分からん」と言われるほどだった。鍋谷さんは立命館大、水嶋さんは日本大と、離れた大学に進んだため、付き合いは自然と減っていった。

2人は研究所の設立を機に再び接点を持つ。水嶋さんは、初代所長で日本大教授の籠瀬良明さんに師事し、日本大で助手をしていた。鍋谷さんは明確な目標もなく大学に進んだ自分と違い、地理学を志して研究者の道を歩む旧友の姿を頼もしく思った。立場は違えど、2人は設立時から研究所に入り、再び親交を深めていった。

水嶋さんが所長に就いてからは、鍋谷さんは副所長となって支えた。2人とも職場を定年退職した後も研究所の活動を続け、「50周年まで頑張ったら引退しよう」と話し合っていた。

◇

50周年事業の準備に取りかかろうとしていた矢先、鍋谷さんは水嶋さんががんを患っていることを知った。療養している自宅に見舞いに行くと、「鍋谷に所長をやってもらいたい」と言われた。突然の申し出に驚くとともに「自分に務まるはずがない」と思った。すぐに答えは出せなかった。

歴代の所長には地理学の大学教授らが就いており、鍋谷さんには「学術の素人がやってもいいのだろうか」という思いがあった。ただ、研究所は地理のイメージが強いものの、設立時から幅広い分野を扱ってきた。

深山猪独活
広田 郁世

実情を考えると、すぐに後を継いでくれるような学者はいない。周囲に相談し、悩んだ末に腹を決めた。「組織を維持していくことであれば、何とかできるかもしれない」

翌年、水嶋さんは帰らぬ人となった。ふとさへへの思い入れが強く、扇状地の研究に情熱をささげてきた研究所の大黒柱だった。鍋谷さんは旧友と共に研究所の節目を迎えられず、残念でならなかった。葬儀の弔辞で遺影に向かって誓った。「輝かしい伝統を汚すことのないよう、その思いを少しでも形にできるよう、会員一同、力を合わせて精進していきたい」

現在、鍋谷さんが中心となって11月に開かれる50周年式典の準備や記念誌の編集を進めている。副所長や事務局長を務めた広田 登さん(77)は「鍋谷さんには役場時代

からの人脈があり、他団体への対応に長けている。郷土史の研究もしていて、歴代の所長と比べても遜色ない」と言い切る。

◇

鍋谷さんが研究しているのは、江戸時代の古文書だ。10年ほど前、友人から町内の旧家に残されていた古文書を預けられた。町役場で文化財を担当した経験を見込まれたようだが、崩し字は難解で、さっぱり分からない。

しばらく放置していたが、「七十の手習い」で古文書に向き合うことにした。独学で勉強し、カルチャー教室に通った。少しずつ文字が読めるようになると、パズルを解くような達成感があった。読み進めると、当時の人々の思いが浮かび上がってくる。

「自分たちの町のルーツをたどることは、今の自分たちを知ることにもつながる」と鍋谷さんは思う。江戸時代の文書には、借金のかたに取られた土地を取り返そうとする小作人と大地主との交渉の記録が残る。痩せた土地で米の収量が少なく、小作人の貧しい暮らしがうかがえた。

田んぼの水持ちの悪さは、扇状地の農家を悩ませてきた問題だった。戦後の復興期には、町内で大規模な土壌改良が行われた。赤土を溶かした水用水路から田んぼに流す「流水客土」という現在では想像できないようなダイナミックな事業。以降、米の収量は大幅に増えた。

鍋谷さんは小学校の頃、流水客土で灰色の田んぼが赤くなっていくのを見た記憶がある。田んぼの基盤整備も進むのに伴って、町内には新たな住宅が増え、風景は変わっていった。「現在の当たり前の暮らしは、先祖の苦労の上にあるんです」

鍋谷さんは昨年、古文書を解説してまとめた初の本を自費出版した。古文書を研究していることが知られ、新たな史料が寄せられる。さらに2冊目を出版し、今後も続編を書いていくつもりだ。

「形にして残しておけば、一からのスタートではなく、将来、引き継ぐ人も出てくる」。そう信じて、扇状地の歴史を積み上げていく。

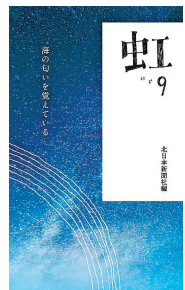
全国から来た研究者たちが驚くのは、住民が黒部川扇状地に暮らしている自覚があることだといいます。全国に600あるとされる扇状地の中では珍しいことだそうです。研究所の半世紀にわたる活動が、地域に浸透している証しのように感じます。

紙面提供／人と鉄のあいだに



OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作／北日本新聞社
メディアビジネス局



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911

高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX

0766-25-7773

mail

niji@kitanippon.jp

次回掲載は10月1日(木)です。